

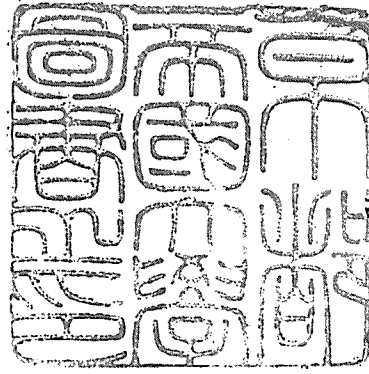
京都哲學會寄贈本

哲學

研究

第六十四號

第六卷
第七册



漢書藝文志の歴史觀

丹羽 正義

漢書の藝文志は支那最初の書籍分類の志書であつて、その由來につきては之を卷

首の總序に詳記して居る。即漢の哀帝の詔により、劉歆が父劉向の業を承け秘府の

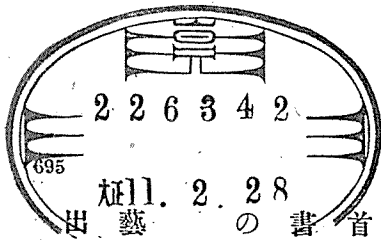
書を校勘し、七略（輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、兵書略、術數略、方技略）を奏せるを、班固が其要を刪し以て篇籍を備へたも

のである。

然して劉氏の七略は已に久しく其傳を失ひ、唐書の藝文志には尙存するも、宋史の

藝文志には已に之を逸し、以後復見えぬ。従て劉班の異同を具體的に知ること

出來ないが、漢書藝文志によつて班固の刪補は極めて瑣末な點に止まり、其思想の主



1. 2. 2. 8

潮は全く劉氏のそれのまゝで班固によつて害はれてゐないことを明かにし得る、
 況んや特に班固の自注(註一)に其の刪補した分を斷つてあるに於ておやである。故にこ
 こに漢書藝文志の歴史觀といふのは漢志にあらはれた劉氏の歴史觀の意である。
 唐の劉知幾は古の制する所我何の力かあらん。班固が漢書に書籍の流別を定め
 て編して藝文志をつくれるは妄載のことなりと論じて居る。(註二)劉知幾の如き英才に
 この言あるは解し難き所であつて藝文志の編成は一代の「文化」を示すものであり、或
 は之によつて「文化」の意義を窺ふことも出來やうと思ふ。

〔註一〕 顧炎武日知錄卷廿六。

〔註二〕 史通卷三。

二

漢志は劉氏の輯略を刪したもので、唐の顔師古は諸書の總要を謂ふといひ(註一)章學誠
 は

蓋劉氏討論群書之旨也。此最爲明道之要。惜乎其文不傳。今可見者。唯總計部目之後。條
 辨流別之數語耳。

と嘆じて居る。(註二)

今漢志に見ゆる劉氏の考を結論する。即上古は結繩以て治め、後世聖人之に易ふるに書契を以てし、百官以て治まり萬民以て察した。(註三)故に官書を守り、法書にあり、治教分れず、官師合一、官を離れて書なく、書あれば必ず法に則る。(註四)著述ある事なし。然るに周室衰微するに及んでは、官守を失ふに至り、官を離れて書あり、書の法に則らざるを生ず。彼等は傳來の官の書を傳ふるより、寧ろ之に據て一家言をなし生計を立てんとするのである。孔子はこの時に出で先王の舊典の亡ぶるを患へて六藝を刪定した。(註五)六藝は先王の舊典にして孔子はその述者である。この故に六藝を序して九種となすは三者を以て傳となして經に附し、所謂附經の傳と離經の傳とを相次せざるが爲である。正しき學は先王の世にありし官守のそれである。其舊典は孔子により刪定されて六藝の書となつた。故に六藝以外のものは流れて某氏の學となり、失して、某氏の弊となりしものにして、必ず其源を六藝に溯る、即六藝の支と流裔である。(註六)この意味に於て短を捨て長を取り始めて價值を得るものである。(註七)學の正しき根據は官守との關係如何にある。あらゆる書はこの點につきて考へられねばならない。かくて六藝略を立て、他と混するなからしめた。但し六藝以外の書を分

ちて諸子、詩賦、兵書、術數、方技の五略とせるに至つては之と必然的關係があるのではない。

正しき學は官守の學であつて、その他の學は流と支である。而して其正しき學たる價值を流支たる點に於てのみ得る。從て其等の學はその某官に出づるを示せば足る。然してその點と五略の分類とは何等必然的關係を有しない。又詩賦略は六藝の一、詩の流支であるとも考へ得るが其他(註八)に至つては六藝略内の分目によるを得ない。即詩と詩賦略との關係を除いては、一が舊典であり、他が流支であるといふのみであつて、一が如何なる官の舊典であり、他が出づるといふ某官と如何なる關係にあるかを考へしにあらざるが故に六藝の分目と四略との間に關係はない。否關係せしむるを得ざるのである。諸子、兵書、術數、方技の分類目は知識の對象によれるものである。諸子は虛理、立言以て道を明かにし、他は實事、法によつて術を傳ふ。而して兵書は兵、術數は自然、方技は人體を對象としてゐる。

是に因て之を觀るに、劉氏の分類の基礎は一は彼の有する理想であり、一は彼の有する事實である。彼の有する理想は彼が孔子の時の事實と考ふるものである。彼の有する事實は孔子以後の發生である。從て彼の有する「正しき學は官守の學也」と

の理想を以ては孔子の時を限界とし正と支とを分類し得るのみである。然もその流支であるとする點に於てすら事實は一書互著の例を許さざるを得なくなつて居る。(註九) 諸子、詩賦、兵書、術數、方技の分類目は即ち彼の有する事實に即して立てらるゝに至つたものである。(之はたと分類目につきてのみならずして各略内の分類名に於ても然りである。儒家といひ、道家といふも事實に即せるものである。) 然してこの二つの基礎をどらしめしものは過去に置く劉氏の理想と現前の事實との距離である。劉氏にあつては孔子の時から彼の時に至る迄の歴史の過程の力である。之を解くものは劉氏の歴史的自覺の意味である。彼の叙述はその書の批判に於て明かに彼の歴史的自覺内容をあらはして居る。彼によれば孔子は支那史上に於ける歴史的自覺の有無の分點に立つ人であつて、彼は孔子以前に合目的自覺あるを示して居ない。從來職務の者が實際上の必要より保存せる記録、傳説は孔子に至りて始めて記録の上に編纂さるゝに至つた。周室の衰微は歴史的自覺の發生を來たした。官書を守り、其官は世襲なりしが爲に記録は各世襲の官職に關する事を傳ふるに過ぎない。彼が先王の舊典と稱するものはかゝる歴史的自覺なき記録であり、六藝は孔子のかゝる記録を刪定せるものである。刪定とは孔子の自覺を以て顧みて過去に溯及したものである。正しき學は官守の學なりとするは正に彼の考へを以て孔子の

時の事實とするものであつて、彼は之を理想とするものである。然して彼の考ふる孔子の時の事實は劉氏の時の事實と一致し得ない。二者の距離は彼の有する理想と彼の有する事實との差である。彼の有する事實は歴史的自覺實現の過程であるが彼の有する理想内容はこれを包含してゐない。歴史的自覺は個性の認識である。個性なるものは生命そのものである。創造的自己表現である。彼はこの生命の個性を理解しない。彼の理想は孔子の時から彼の時に至るその間の事實を無視するものである。かの歴史的自覺の先覺者孔子はその自覺を自覺實現の事實から得ずして亡びんとするを傳ふる餘儀なき回顧に得た人である。彼の有する歴史的自覺の内容は彼が自覺を溯及し得たる過去の過程である。孔子は政治家として又復古的な人であり大勢に逆行する人であつた。劉氏の理想はこゝから出てゐる。彼は哀帝の時の儒學者である。六藝は獨り儒家のみの經典にあらず、百家を超越すとし之によつて理想を立てた。従て彼の理想は彼の事實を包含し得ない。なし得る所はこれを理想外におくことであつて六藝は正しき學、他を否らざるものとし得るのみである。即諸子、詩賦、兵書、術數、方技の分類目に至りては理想を去つて發生の事實に従へるを物語るものである。然して之を各略内の分類名につきて見る時は、支と

流裔とせるは彼の理想によるものであり、儒家道家等といふは事實に基くものである。

〔註一〕 漢志總序の註。

〔註二〕 章學誠校讐通義卷一原道第一。

〔註三〕 漢志六藝略小學の部序。

〔註四〕 同上春秋の部序參照。

〔註五〕 同上各部序。

〔註六〕 漢志各略の序。

〔註七〕 漢志諸子略序。

〔註八〕 漢志詩賦略序。

〔註九〕 章學誠校讐通義卷一五著第三。

三

彼の分類の基礎既にかくの如しとすれば彼に個性の認識——歴史なる概念のあるはづはない。然しながら歴史的自覺は周末に發生し孔子等も之を有し、從て歴史的自覺實現の過程がある以上、少くともその記録もあることは考へられる。然らばか

かるものに對して彼は如何なる考を有して居たか。換言すれば彼の歴史觀は如何。藝文志に於て個性の記録といひ得るものを求むるに六藝略の春秋の部に附せられて居る。太史公百三十篇はその最もよき一例である。然して六藝略の書部と諸子略中に見ゆるものを擧ぐるは漢志に於ける意味からは不穩當である。(註一)然らば之に如何なる考を有して居たか。

劉氏は

春秋以斷事。信之符也。

といひ又(註二)

古之王者。世有史官。君舉必書。所以慎言行昭法式也。左史記言。右史記事。事爲春秋。言爲尙書。帝王靡不同之。周室旣微。載籍殘缺。思存前聖之業。(中略)以魯周公之國。禮文備物。史官有法。故與左丘明觀其史記。據行事。仍人道。因興以立功。就敗以成罰。假日月以定歷數。藉朝聘以正禮樂。有所褒諱貶損。不可書見。口授弟子。

と記して居る。(註三)彼の考へる春秋は客觀的事實の知識に基くものであつて、人生の目的を助くる處に價值ありとさるゝのである。その尙書と異なるはその知識の歴史的自覺との關係にある。尙書の知識は知識のための知識であつて列學的である。書

以て聽を廣む、知の術也といつて居る。(註四)春秋は歴史の自覺に基く知識である。然して孔子は之を歴史的自覺より共に刪定するに至つて居るが、その知識に對する考は一種の倫理哲學によつて統一さるゝものであつた。劉氏が個性の記録を尙書に類せず春秋に附したのはまづそれが客觀的事實に基く知識の記録であつて歴史の自覺に立脚する點による。然も此等は春秋の傳ではない。然らば何が故に六藝外に出さゞりしか。是れ其知識が王官の支と流裔たるが故に正しきものとして價值づけらるゝにあらざるとともに、それが春秋の傳に非ずとも倫理哲學によりて統一さるゝが爲である。こゝに王官の舊典にあらずとも正しき知識、正しき學のある讓歩がある。事實に對する劉氏の服従である。以上によつて之を觀るに劉氏の歴史觀は客觀的事實に基き歴史の自覺に立脚する知識であつて人生の目的に役立つものである。然して人生の目的に役立つと否とは正しき知識か否かを決するものであつて、一王上にあり政道其軌に運轉する際は學は官府に統一されるのが彼の理想であつて、従て孔子の六藝刪定以後あり得ないはずのことであるが發生の事實は彼の理想を服するといふのである。

〔註一〕それ等は個性の記録としては全く關係なき意味で取扱はれてゐるからである。

〔註二〕 漢志六藝略の序。

〔註三〕 同上春秋の部序。

〔註四〕 漢志六藝略の序。

四

劉氏の有する理想は彼の考へる孔子の時の事實であつて、事實に關してはそれ以後の發生を包含し得ない。この彼の理想によれば歴史は歴史的自覺に立脚する客觀的事實に基く知識であつて官守の學であるといふこととなる。彼は正しき學は官守の學であると考ふるが故にこの根柢によつて統一される歴史的自覺に立脚する客觀的事實に基く知識が歴史といふことになるのである。次で彼の有する事實によれば歴史は歴史的自覺に立脚する客觀的事實に基く知識であつて人生の目的を助くる處に價值あるものとなる。彼が考ふる孔子の時から彼の時までの距離は正しき學は官守の學也とする考から、人生の目的を助くる價值ある知識といふ考にまで變遷せしめた。

然してこの變遷は歴史なる知識から眞理性を奪ひ去るだらうか。漢書藝文志の

歴史觀の研究の意義の有無も亦こゝから定められると思ふ。

私は現今唱道せらるゝ新理想主義の哲學でいふ歴史もやはり歴史的自覺に立脚する客觀的事實に基く知識であると思ふ。知識とは何か。この考へ方が異なるのみである。否歴史觀は劉氏の理想と事實とそして現今の新理想主義の哲學の間に差があるのみではない。時代により人により異なるのである。然しながら之は眞理性をなくするものでないと思ふ。ある一つの立場を限定するばもとより一定の道が生ずる。この變遷こそ歴史は單なる知識ではない、人生の要求の一表現であることを示すものである。知識の上での人生の要求は其最後の統一である。然して自我の經驗を容れずして知識の最後の統一に達するを得ない以上、歴史觀も自我の知識をも容れてその統一の上に形づくらるゝのである。實際最も具體的なものは一般的なものにあらずして、特殊なものである、人格的なものである。一般的ならざるが故に眞理性なしといふことは如何にしてもいひ得ぬことである。事實と矛盾する空漠たる思辨にどうして眞理性を認め得やう。それは事實を超越するものでなければならぬ。但し事實に執する獨斷論はもとより普遍妥當性を缺くものである。知識とは何か。これだに定まらば歴史觀もおのづと定まるのであつて、然も知

識とは何かといふことは、人文の創造的自我表現の過程を語るものである以上、歴史觀の變遷は「文化」の變遷を示すものである。

過去に理想をおく劉氏の理想からの歴史觀と彼の有する事實からの歴史觀との距離はその間の文化の變遷を語るものであつて、同時に彼は逆行的努力をなしつつあるものであつて、然も事實に屈服せざるを得ざりしを示すものである。彼の理想、ひいては漢より綿々として絶えざる支那人の理想なるものは「文化」の過程に逆行するものである。支那の歴史を講ずるものこゝに立脚せねばならない。

尙劉氏の理想といつても彼の考ふる孔子の時の事實と孔子の時の事實との間には差異がある、この二者の間の差異を明かにしその由來を考察することは重要なことであるが本論は大體を説くに止める。